

「実学」とは日本学

—三つの開化を通して(二)—

岩手大学名誉教授

藤原 暹

前稿(一)ではいわゆる「第二の明治文明開化期」[※]をめぐる「実学」の問題を主として翻訳学という形のテクノロジ(科学技術導入)としての「実学」を中心に考えた。その際に開化までの以前の準備・形成状況と成立期・開化期そのものの状況、さらに以後の反省と転換過程を考えた。明治の終わりには、すでに「実学」はほぼ使用されなくなっていた。しかし、これは「実学」という用語が死語となった事を意味する訳ではない。あらためて、「第三の文明開化期」である昭和二十年以後の「実学」の前提を形成し、展開させたものとして把握したいと考え、この(二)の論文となった。

以下論述する訳であるが、それに先立って幾つか問題点を掲げておきたい。

「第三の文明開化」と「実学」の問題は丸山真男氏の「福沢諭吉における実学の転回……」によって開かれたと言つてよい。

丸山氏のこの論文は、明治の開化期における福沢諭吉の旧学問に対する新学問としての「実学」を東洋学(主として儒学)対西洋学の転回と把握し、そうする事によって、丸山氏自身の置かれた「昭和の文明開化期」たる昭和二十年以後の新学問の根底にしたのである。(以下、第二、第三の開化を明治開化、昭和開化と呼称したい。)

当然、東洋倫理学（例えば、西晋一郎の「実学」それは中国から導入された伝統的な「実学」である⁽¹⁾）は否定されて、新しい西洋自然科学を導入した「実学」への転回を図ったのである。つまり、福沢と丸山は「実学」において互いが互いを強め合う形で成立したのである。その際に新しく欧米学の翻訳的な作業が要求された事は言うまでもないのであつた。⁽²⁾

課題はここから出てくる。つまり、昭和の開化期までに、明治の文明開化における「実学」をめぐる東洋学対西洋学の問題はいかにその後において展開（転回でなく）したか、という問題である。

本稿は東洋学的実学の展開として、第一節に徳富蘆花『竹崎順子伝』に見られる「実学」を、第二節として西洋学的実学の例をイギリスのサムエル・スマイルズ『セルフ・ヘルプ』の導入と「実業」としての実学―武藤山治『実業読本』、第三節としては昭和におけるその展開を山本有三の『路傍の石』の「実学」に求めたい。

終わりの第四節には、島崎藤村が終局の課題にした「国学の実学性」の問題にふれておきたい。

一、徳富蘆花『竹崎順子伝』に見られる「実学」

徳富蘆花が伯母順子の伝記を東京・福武書店から出版したのは大正十二年四月である。兄蘇峰にとっても順子は伯母であつたが、伯母は生前に「わたしの経歴はああた書いて」と頼まれていたのは蘆花であつた。この伝記は竹崎順子を中心ではあるが、妹達（徳富久子、矢島楯子、河瀬貞子）の事蹟も叙述されている。言うまでもない事であるが、徳富一家は肥後水俣の郷土で惣庄屋兼代官という名門であつた。父一敬、母久子をはじめ、順子姉妹は横井小楠、横井時雄、海老名弾正などと親類縁者の關係にあつた一族。この關係は「肥後実学党」の中心的存在であつて、明治維新―開化前期にかけて大きな足跡を残した。⁽³⁾しかし、かかる点の「実学」については、前掲丸山論文は全然視野に

入っていない。(戦後の実学研究でこうした横井(肥後)実学問題をも考察したのは源了圓氏であった。)

蘆花の作品は、全体が二十八章立てであるが、その第十三章以下二十四章まで全体の半分が「熊本女学校」の記述に当てられている。従って、蘆花はこの部分に力点を置き伯母の事蹟を叙述したとも考えられる。

本論で問題にする「実学」という点からすれば、それは形成期ではなく、彼女の身につけた「実学」の帰結・完結であった。その形成過程である前半部分が重要と考えられるし、そこに「実学」というタームも多用されているのである。(もつとも全てが「事実史」ではない)。「実学」という表現は「第四章 横井小楠」、「第五章 布田」から使用されている。「第四章 横井小楠」の三節は肥後の「明德派の坪井実学」と「新民派の横井実学」の起こりを叙述し、「成長していく実学団体」として横井家塾が描かれている。その代表的門下として、三人がいた。以下はその叙述である。

四十を越した横井小楠は、もう酒失で帰国蟄居当時の横井平四郎ではありませんでした。同志の友も出来、及門の数も多く、屹とした勢力を銀杏城下に張つて居ました。江戸遊学以前から横井と布衣の交があつた細川三家老の一人、一万五千石の禄を領する長岡監物は容は、温良恭謙の君子人で、君侯の信任も厚く、横井も深く意を属して随分無遠慮な切磋もしたものでした。横井が十三の年馬を並べて騎射を習ひに行く途中志を語り合ふた下津休也、後で明治天皇の師傳となつた元田東野、其子は長岡監物の嗣子米田虎雄と共に同じく明治天皇の侍従であつた荻昌国等が横井の同志でした。学問は詞章記誦の虚学であつてはならぬ、日常生活に切実な己の為人の為にする実学でなくてはならぬ、と云ふ主張から、熊本では此一味を実学連と呼んだものです。門地声望は監物を推しましたが、実学連の魂は横井平四郎でした。後では監物も横井の英気にたぢぢぢの気味で、所謂明德派の坪井実学と新民派の横井実学と二派に分れましたが、此処しばらくはまだそれ等の破綻も見せません。実学連の頭目は、時務に明らかに、時勢に敏感でした。彼は旧套を脱いでずんずん成長して行きました。成長する彼を中心

とする実学団体も、彼につれてずんずん成長して行きます。門人に洋式砲術を習ふ者があつたり、蘭法医者があつたりすれば、先生は攘夷が通り言葉の其中に到頭開國論を唱へ出します。極端な国粹把持の神風連や現状維持の学校派は、実学連を殊に頭目横井を睨まざるには居ません。

相撲町の横井家塾には色色の人が集みました。講読は古い古い経史、宋学の書類を借りて、問題は生々しい時ものをつ捉へました。修身から治国平天下まで打通しの講習です。師弟の間は親しく、互に手を引握つて碁の手を争ひ、撃剣なども猛烈にやつたものです。癩癩も烈しいが、爽な人で、師の門を訪ふ弟子は二三里前から足が軽うなりました。(以下中略)

横井は相変らず貧乏でした。兄は細川領豊後鶴崎の御郡代、後では奉行職に居ましたが、清廉で家に余財なく四十を越してまだ定まる妻もない部屋住みの平四郎は門生の謝儀が唯一の収入でした。謝儀は区区でした。竹崎律次郎新次郎の如く米三四俵を納るるものもあれば、年末に兄弟各金拾両を納むる徳富もありました。塾の建築、先生の旅行など云ふ臨時の出費は、勿論子弟が喜んで負担したものです。……実学社中は親密でした。格式を云へば御惣庄屋などとは段違ひの長岡監物なども、大形の豪傑袋を背負ひ、草鞋脚絆甲斐甲斐しく三太郎の急阪を越えて、葦北までもやつて来ました。順子の兄源助が後年迎へた妻糸子は監物の家臣堀氏の女で、監物の妻の側近く仕へて居たものです。横井門も次第に殖えて来ましたが、葦北の徳富、中山の矢嶋、布田の竹崎は、古参と云ひ、年来の情誼自づから殊なるものがあつて、云はば内輪の直参、鼎の三足を成して居ました。師の横井は斯く三人を評しました。

「竹崎は器用過ぎて、考が深く及ばぬ。徳富は考が綿密過ぎて、決断が足らぬ。矢嶋は不凡で眼も見え果断だが、後がつまらぬ。」(以下傍線は筆者補⁽⁵⁾)

この叙述は、横井小楠を中心にした「新民派の実学」が西洋学を取り入れ、開國論を展開して開明的な「実学連」

「実学団体」、「実学社中」を形成し、「明德派の坪井実学」を退けていった新旧交代の様子をよく示している。言わば、東洋学たる儒教派の中の新旧の対抗であった。

そうしたグループの中で竹崎律次郎、徳富熊太郎、矢島源助という異なる個性の三人が台頭してくる経緯を物語っている。

なお、後に明治天皇の侍講になる元田永孚（号を東野）は横井の影響を強く受けていた。ただ、明治天皇・昭憲皇太后への実学の影響という場合にこの肥後実学派のそのみで済ます事は出来ないであろう。⁽⁶⁾

豪農の竹崎律次郎と順子が結婚したのは順子十六歳（天保十一・一八四〇）であるが、山気の多い律次郎は米相場に手を出したりして破産。一時行方不明で順子は実家に戻っていた。弘化元年に布田の独鈷山に堀立小屋を建てて夫が再起生活をはじめたと聞き順子はかけつけた。荒野を開拓し一歩一歩生活を立てていった。その中で夫は横井塾に入門するのである。（なお、律次郎をモデルにした木下順二の戯曲『風浪』は昭和二十二年である。）

肥後の維新後、熊本は実学党が県政を握り洋学校（お雇い外国人アメリカ人「F」の指導）も出来るが、徳富一敬は竹崎律次郎を排斥する。官を辞した竹崎夫婦は私塾「日新堂」を作る事となる。次はその「実学」の状況である。

官をやめた竹崎律次郎と順子は、熊本の高田原町から郊外本山村に屋敷を求めて移りました。養子吉勝（熊太改）節子夫婦も子供を連れて横嶋から出て来て其処に同居する事になりました。本山村は今の本山町です。それは白川を中にして熊本停車場に近く、北西の二方を白川が矩形に流れ、南東は宇土下益城まで打つづく平蕪で、昔は静かな土族村でありました。順子の長姉三村には子夫妻は大分前から其処に住んで居ました。藤嶋もと子も高田原から其処に移つて居ました。小楠門下の太田黒惟信、嘉悦氏房、医師内藤泰吉、其他も前後して其処に住むで居たので、本山村は実学村の観がありました。此処に引越した竹崎律次郎夫妻は、家塾「日新堂」を興すと共に、手広い屋敷に多く茶を植えて、製茶など盛にやらせたもので、律次郎が茶堂の号もそれから出ました。櫛と桑と

楮は以前から肥後でも奨励したものでしたが、殖産興業の上に眼早い律次郎は茶が今後の一大国産であるべきを予想して、躬づから範を示したのであります。律次郎は一時白川の雅号を用ゐて居ました。肥後が白川県となつたので、白川の号を廢し、以後は専ら竹崎茶堂を名のるやうになりました。竹崎茶堂先生の名は、家塾日新堂と共に当時の肥後に響いたものであります。日新は大学の「日日新又日新」からとつたのです。

最初元田東野の門に入り、後竹崎茶堂の高足弟子であつた阿蘇の蘇門、園田太邑が茶堂の孫竹崎八十雄に書き送つた下の一文は、よく日新堂の消息を伝えて居ます。

「私は原と元田東野先生の塾生です。……東野先生は所謂肥後実学創始者の一人です。……東野先生の東上によつて講学の路を失ふたる私には、小楠先生の高足たる茶堂先生の門に投ずる事は寧ろ当然の事です。……」

日新堂の開設は、明治五年頃と思ひます。其れは東野先生の東上が其前年であつたやうで、五年頃までは私共は猶遠からず帰県せられるものと思ふて居たので、先輩等と共に只管ら其空巢を守りて鶴首俟て居たのです。而して恰も好し本山に竹崎といふ小楠先生高足の大学の開講があると云ふので、同窓相携へて其夜会に出席したのですが、其後東野先生は陛下の侍講となられて帰県の期し難き事が分つたので、遂に日新堂に入塾する事になりました。大学の会は、毎も本山の御本屋で開かれました。或日大学の日新の章の処にて、今度開いた塾の名称も日新堂とせんと思ふ、と先生が申されたのを記憶して居ます。……

本山の御邸宅は、旧藩士某の邸宅を買受けられしもので、可なり家屋も手広なりしやうです。書院の間があり、其次の間があり、玄關の間があり。書院の間から鍵に折れて、部屋があり、続いて小部屋があり。此二間が老先生御両方の常住と、内輪客の応接間に充てられて居ました。勿論台所があり。其に引つづいたる一間があり。是が若御夫婦及孫御方の居間であり。其他にも幾間かありて、其処にて蚕児を飼育されました。書院の間は、南に面して居り、十余坪の空庭がありて、其向ふ一面は茶園となりて居ました。邸内に数台の火室を据ゑて製茶せら

れた程であれば、茶圃も比較的狭からざりしが知れます。先生の茶堂と云ふ号も、是れに由りしものです。邸宅の三方南も東も北も道路を以て繞らした一区郭です。南の道路を隔てて、其も旧藩士某の邸宅を買収して開られた塾が即ち日新堂です。其本屋の方を普通課の所として、中年以上の生徒が居ました。学課は経書、歴史、地理、算術でした。其長屋の方に、成童未滿の小学生が居ました。初めは漢籍の小学によつて教方でしたが、明治七年御両方の東遊の時は、東京府にも既に掛図等を用ふる教授方が不完全ながら施されて居ましたので、随行の書生誰彼に其様式を習はせて、帰熊後は其れに依られたのです。小学令の發布はずうと其後の事で、布令前に其形で教へたのは、日新堂の小学部と、阿蘇郡中通村の小学校が、蓋し本県の嚆矢です。……

茶堂先生は、古城なる洋学校に聘せられて居た米人ゼエンス氏とも、御深交がありました。先生は同校生徒の爲めに大学を講ぜられし事もあり。氏が官宅には最も頻繁の御訪問があつたやうです。氏も亦本山の御宅に来訪せしを屢見受けました。

先生は古城に在りし県立病院及び医学部の修身講義嘱託も受けられてゐたので、其院長なりしマンスヘル氏との御交際も、無論浅からう筈はありませんが、氏の本山来訪は減多に見受けませんでした。……

當時にありて、藩学の時習館が解体されて、学生の教授は殆んど皆無の情態でして、上通丁に平川某と云ふが成童未滿の生徒を多少集めて居り、古新屋敷に栃原某が中年以上を多少集めて居ました。蓋し両氏は共に所謂学校派系の学者にして、保守一点張と聞いて居ました。其外には嶋崎に例の兼坂費百梅翁が家塾を開ひて居り、蘇峯氏など其生徒でした。勿論氏は縁故上大江にも將た本山にも折に触れて來塾はありました。百梅翁は前両氏の如く保守一点張ではないです。けれどもまあ申さば稍や仙人染みて居るので、時勢と掛け離れし点に於てもさのみ徑庭はないやうです。是が抑々茶堂先生が日新堂開設を思ひ立たれた所以であつて、唯一片愛國の誠に出で、自家の名利や学殖の如何やは、蓋し顧みらるるの違なかりしと思はれます。先生は常に相当の材器を得て此事業を

譲りたいと念に思ふて居られたやうですが、遂に其人を得ずして該塾を畳み、高野辺田に塾居せらるる事になりました。真個遺憾の至りです。⁽⁷⁾

以上の叙述から、幾つも興味深い事項が判明する。

1. 白川を中心にする熊本停車場の近くの本山村に土地を購入して「私塾日新堂」を明治五年頃に開いた。(熊本停車場は後年の設置。)

2. 日新堂は日本各地に出来たが、熊本・日新堂は豪農層出の竹崎夫妻の手による私学校で、小学部と普通部(中年)をもつていた。

3. 教育は「明堯舜之道、尽西洋之器械之術」という小楠実学の流れを受けていた。洋学校とも関係があつた。お雇い外国人 James の影響については別の叙述がある。⁽⁸⁾

4. 「愛国の誠」をもつ「殖産興業」的人材を養成して行く。これは「実業の実学」への道とも考えられる。

などであるが、この「実学村」と目される本山村には徳富の次男・健次郎(蘆花)がよく「出養生」と称して預けられていたのである。ここからも「実学」が健次郎に流れていたと考えられるし、また伯母順子の伝記をも書く縁となつたのである。

しかし、伯母夫婦の世代と蘆花の時代は大きく異なつてきていた。蘆花の思想や学問形成過程を示した『思い出の記』(明治三四)には、いわゆる「肥後実学」は直接に叙述の対象になつていないのである。「肥後実学」は歴史的タイムとして自覚されたとも言えよう。

二、武藤山治『実業読本』の実学

明治の実学が「実業教育」の方向で大正へと連続していった事は、洪沢栄一『青淵百話』（一九一〇）の例でも明確である。彼の主義が「論語と算盤」という東洋主義にあった事は知られるが、明治六年に捧呈した「建白書」には「開明ノ民力上ヲ重ンズルハ実ヲモツテスルモノナリ……欧米諸国ハ民ミナ実学ヲ務メテ知識に優ナリ」とある。この考へは当時中村敬宇（正直）がS. スマイルズの『セルフ・ヘルプ』を翻訳し出版した『西国立志編』の考へであった。⁽⁹⁾

こうした中に、次に紹介する武藤山治の『実業読本』（大正十五・一九二六）がある。その目次は次のようである。

序

- 一 実業という言葉の意味 九 理想
- 二 実業の精神 一〇 研究の必要
- 三 自尊心 一一 使う人、使われる人
- 四 自制心 一二 責任観念
- 五 自治精神 一三 協同の精神
- 六 博愛の精神 一四 失 敗
- 七 卑屈心 一五 金儲けの秘訣
- 八 品性 一六 人生の真意義

彼はまず、「実業という言葉の意味」として、Businessの訳語であるが、Workの意味であるとした後、

我国においては、実業といふ実業家といへば何か商工業、または商工業に従事するものに限るようには解せらるるのみならず、商工業者のうちでも、大組織の下に営業するものだけに限るようには考へる人がすくなくない。これははなはだしい間違ひである。⁽¹⁰⁾

と述べ、「実業」を特定の職業（伝統的表現によれば身分）として把へることに反対する。そして、「実業とは」という米國鋼鉄会社社長イー・エッチ・ゲリーの講演を引用し、

およそ、生活または利益を目的とするすべての仕事は実業である。さらに広義に解すれば、人生におけるいかなる仕事も実業であり、その成功は一に実業の精神によるものである。……中略……実に実業に対する各人の成功は、われわれの生存の上に根本的必要事である。⁽¹¹⁾

と言う。各人の「人生そのもの」が実業を意味し、意味する故に実業はそれを高める精神＝成功の精神を前提にすると言ふのである。

ここでは「人生そのもの」が高められるべきもの、「生存」が成功を必要事として「在る」べきものとされ、そうした内的精神を發揮しつつある事が、「仕事」であり「実業」であり「生活」であると考へられている。

「実業」は「生存（生命・生活）」の根本とした上で、彼はその根本をいかに形成するのかわつていく。ここにスマイルズの考へが援用される。

『西国立志編』の新しい大正昭和の日本国立志読本という感じがする。その「十四 失敗」にエジソンの話を引用した後、

かくのごとく人々はつねに天より与えられたる才能があるから、学校で落第したぐらいの失敗で悲観するようではならぬ。かのスマイルズ博士の言を味わうべし。「人は成功を求めて成功するものにあらず。人は失敗を得て初めて成功するものなり、世の中にもつともよき経験は失敗よりなるものである、ただ、異なるところは失敗

により挫折するものと、失敗により将来に備えますます奮励努力するものとの相違があるのみである。⁽¹²⁾
とS・スマイルスの言をあげ、さらに、

コブデンはマンチェスターの公会において、初めて演説を試みたる時、半途にして逃げ込み、聴衆はかれの失敗につき弁護する滑稽を演じたとのことである。またジスレリーも、演説の初舞台に失敗して、聴衆より冷笑と罵詈雑言を浴せられたが、後大いに勉強して、ついに議会第一の雄弁家となった。⁽¹³⁾

とコブデン、ジスレリーの事蹟を紹介している。このコブデン、ジスレリーの事蹟こそ『西国立志編』第二篇にある次の引用なのである。

リチャード・コブデン (Richard Cobden)、また卑賤より起りし人なり。サセックスの小農の子にして、幼年の時に、ロンドンのシテイ(交易繁盛の市街)に送られ、貨物棧房の小厮となり。コブデン、勤勉にしてその行い正しく、またはなほだ見聞を広むることを好みけり。その主人は、昔郷校に在りて学びたる人なりしゆえ、コブデンの書を読むことの過度なるを見て、これを戒めけるが、この童子己の嗜好に任せ、書中に遇うところの宝貨を、その心に貯うることを勉めたり。

これよりしだいに發運し、後にマンチェスターに住し、白布に花を印することを業とせり。コブデン、常に公衆の疑問に心を用い、なかならず民衆の教育たるべきことに意を注ぎたり。そもそも古より英国において、穀物入口の税を取むること、立てて法制となりしが、コブデンこの法の公益ならざることを熟知し、これを廢せんと欲して、錢財を費やし、心力竭くしたり。すでにしてパラメント(議會)公議協同して、この法を廢せしは、実にコブデンの力なり。

コブデンはじめて公会において宜説せしときには、言辭つたなくして敗れを取りたれば、發憤して言辭を學習し、久しゅうして怠らず、後ついに談説勢力ありて人を勧誘する宜論者と称せられ、ロバート・ピール(ピール

は、はじめ穀税法を廃する説を駁せるものなりしが、後にはコブデンの説に同じけりといえども、これを称誉するに至れり。⁽¹⁴⁾

つまり、産業人の自立に『西国立志編』の「自立」の要件が深く関わり継続しているという事である。(なお、武藤は彼の「従事する鐘淵紡績株式会社の従業員には、スマイルス博士の『品性論』を与え、つねにこの書物を友人として携え、品性を磨くことを心得るよう奨励し(た)」という。)

以上のように武藤はスマイルズの影響を受けたのであるが、それは直接に受け止めた以外にスマイルズの言からヒントを得て、更にその言行の背景にあるものを受け止めていった事が考えられる。この点について、B・フランクリンの箇所を考えてみる。次は『実業読本』の第九章の一部である。

空想を抱く青年の中には、ときとして大勢のためなら少数のものは犠牲にしてもよいと考えるものがあるが、誤った考えである。このことについて、かの有名なるベンジャミン・フランクリンの父が、フランクリンを戒めたことがある。フランクリンは後には偉い歴史的人人となったが、子供の時は可なり腕白で、その家はボストン付近で、毎日他の子供とともに池で魚を釣っていたが、いつも腰から下は泥濘なる池の水に浸さねばならぬので、その不便を免れたいために、ちょうど付近に建築されんとする家に用いるため、多数の石が置いてあったのを幸い、他の子供とともに、その石で池の中に波止場を造り、自分らの不便ばかりでなく、船を繋ぐ人にも便利であるから、大勢の人のために一人の利益を犠牲にしたまでのことゆえ、むしろよいことをしたものと思っていたところ、翌日その大工の親方が、これを知り、すぐその筋へ訴え出でたため、警察に拘引され、取調べを受けたが、幸いその家主が穏和な人で、願ひ下げをしてくれ、赦されて家に帰った。その時かれの父はフランクリンを戒めて「一人の不利が大勢の利益になるから、むしろ善き行為と思っておまえの考えは間違っている。おまえの行為は大勢のために一人の利益を犠牲にするだけではない、社会に対する道徳上の罪を犯すものであってよくない、す

べて何ごとも正義に基づいてなさねばならぬことを生涯忘れてはならぬ。悪しき手段によって善き目的を達せられると思うは誤りである。清き目的は正しい手段によりてのみ達せられるものである」と言った。⁽¹⁵⁾

フランクリンについては、すでに『西国立志編』に三カ所にわたって紹介されている。しかし、ここでは、フランクリンが「稲妻の些細な観察からの発見」とか「正直な品性の持ち主」とか「少時にコットン・マザーの実例本の影響」などの断片的な記述に終わっている。(なお、フランクリンの有名な「十三徳」についてもほぼ同じ頃に紹介され影響を与えてはいた。)

右の文は明らかに『フランクリン自伝』からの影響である。(この伝記の紹介は国木田独歩の民友社・少年伝記叢書『フランクリンの少壮時代』が知られるが、独歩はまた『西国立志編』の愛読者・正作少年を描いた『非凡なる凡人』の作者でもあった。)⁽¹⁶⁾『自伝』では次のようになってい

十の歳の私は学校を下つて父の商売を手伝うことになった。そこで私は、蠟燭の芯を切つたり、蠟燭の型に脂を流しこんだり、店番をしたり、使い走りをしたり、といった仕事をやることになった。

私はこの商売が嫌いで、船乗りになりたくて仕方がなかつたのだが、これには父が反対だった。しかし家が海辺なので、私は始終海へ出て遊び、早くから泳ぎがうまくなり、ボートを操ることを覚えた。他の少年たちとボートやカヌーに乗つたりする時はたいがい私が指図をすることになったが、とくに何か困つたことが起つた時はそうだった。その他の場合でもたいがい私がお山の大将で、時にはみんなをひどい目に逢わせることもあつた。その一例を述べよう。それを見ると、当時はまだその用い方が正しくはなかつたものの、小さい時から私は公共的な企業精神があつたことが分るのだ。

水車池と一ヶ所境を接して塩沢があつて、潮が差してくると、私たちはその岸へ行つて小魚を釣つたものだが、始終踏み歩いている中にそこらがるで泥沼のようになってしまった。そこで私は足場に都合のいいお台場を作

ろうじゃないかと言い出して、山のように積んであった石材を仲間の者に指し示した。それは沼の傍に家を新築するための石だったのだが、私たちの目的に詭向きのように思えた。そこで夕方大工たちが帰ると、私は遊び仲間を大勢呼び集め、みんな一緒になってまるで蟻のように熱心に働き、時には一つ石に二人も三人もかかって、とうとう全部運んでしまつて、小さなお台場が出来上つた。次の朝、大工たちは石がなくなつて、お台場ができているのを見てびっくりした。誰が運んだのだという詮議になり、私たちがだといふことが分ると、みんな小言を言われた。中には父親に叱られた者もある。私は自分たちのしたことは役に立つことだと言いつつ張つたが、父は正直にしたことでなければほんとうに役に立つものではないと論じた⁽¹⁷⁾。

武藤はスマイルズの作中の言からの影響を受けながら、さらに『伝記』からの影響を連鎖的に拡大していく。かくして、「実学」は「実業」・「実践」という現実生活への応用化・運動化に転じていった。彼が繰り返して「内的精神とは何か」を「実業」として説く理由もこの点にあった。

「三、自尊心」「四、自制心」「五、自治精神」「六、博愛の精神」等が説かれ、逆に「自尊心なく自制心なく、自治精神なく、博愛精神もなき国民の心に（宿る）卑屈心」を否定する。この自尊、自制、自治、博愛の内面性が「品性」の向上をもたらすことを武藤は述べる。大正八年十月ワシントンで開かれた国際労働会議に出席した彼はそこに「世界各国人種の品性の試験場」を見、「品性は世界における最大原動力の一なりというスマイルズ博士の言」のたしさを再認識している。かくして最終節「一六、人生の真意義」において、

昔の話に、神が人間を創造するとき、傍らの天使が満足の心をも加えんことを望みたるに神はこれを斥けて、満足の心だけは人間みずからをして得せしむべしとて、これを除かれたりとの話がある。此人が満足を欲して満足を得ず、終生煩悶するゆえんなるか。ここにおいて、われわれは人生の真意義はいずれにあるかを考えねばならぬ……中略……ゆえに現代社会の制度に向つて不満を抱く人々は形の上に相争つてその目的を達せんとする

よりは人の心の改造に向つてその努力を捧ぐべきである。⁽¹⁸⁾

と国民の精神的改造を唱えた。この武藤の考えは一つには「維新以来、わが国は長足の進歩をしたと言える(が)、しかしこれは外形においてであつた。それがため払つた内面的の犠牲ははなはだ大なるものがある。われわれは古來武士の間に存在した武士道を失つてゐる。……かく観ずればとて、私がわが国民の心に建国以來の大精神が宿つてゐることを無視してゐるのではない。しかしこの大精神はわれわれ一般国民が日常生活の準繩たらしむるにはあまりに尺度が大に過ぎる。かるがゆえに私はここに実業精神なるものを説いて、仏教のいわゆる小乗たらしめたいのである」という武士道に代る新しいモラルとしての「実業精神」を立てることにあつた。その限り、『日本自助論』とは異なる形で「国民精神振興」の一翼を荷うものであつた。しかし、いま一つここで武藤の説く「わが国民日常の行いを律する道徳心」という日常生活の経験即道徳という運動の性格は、実は明治以来外来文明の翻訳・受容に対して明らかに日本独自の「セルフ・ヘルプ」を生み出した事象として意味深い。

三、山本有三『路傍の石』における「実学」

昭和十二年に朝日新聞に連載した『路傍の石』は有三の自伝的要素が強い作品であると言われている。この作品には既に論じてきた点と関係する二つの事柄があるので取り上げてみる。

一つには、「実学」と題する章があり、「実学」に対する登場人物(主人公の先生である次野立夫)の受け止め方が示されている事である。

二つは、主人公吾一の自己実現の道に、中村の『西国立志編』や福沢の『学問のすすめ』が係わっているからである。(これら二つの作品は戦後になって改めて日本の読者に迎えられる事になるので、戦前・戦中・戦後を貫通するものを保持し

ていたと言える。」

では、「実学」はどのように叙述されているであろうか。「実学」という章は次野先生が知友のいなば屋の黒川安吉と酒を酌み交わしている場であるが、話題は次野先生が才能があつても家庭の事情で中学進学が困難な吾一を庇つて、学資をだしてもらえないかという頼みをする所から、家庭の事情に及び士族出の父親が外国人をなくつたため訴訟中であり、出費がかさんでいる事から、条約改正問題などに及んでいった後……次野先生の「実学」発言が出てくる。

「社会有用の学をやれつて言うのかい。ちえつ、これだから慶応になんか行つたやつは、おれは、きらいだつて言うのだ。」

赤くなつたほおをふくらませながら、次野はぶうつと大きな息を吐いた。

「このごろは、なんでもかでも実利実益だ。そりや実利も結構、実益も結構さ。しかし無用の用つてこともあるんだからね。いくら実業社会が発達したつて、そんなこつて人間社会は発達しやしないよ。安さんの前だが、おらあ、福沢さんて人は、だいたい、虫がすかないね。」

「どうして。あんなえらい先生は、ふたりとありやしないよ。」

「えらい人にはちがいないだろうが、文学を尊重しないから、おりゃきらいだ。」

「はははは、あんたは文学でなくつちや、夜も日もあけないんだからな。」

「しかし、君、和歌をとつつかまえて、『三十一文字も三味線に合してコリヤサイの調子に唄へば都々一と等しく矢張り野鄙なる可し。』なんて言われて、黙つていられるかい。失礼ながら、福沢先生には、文学はまるつきりわからないんだと思ふね。」

ひさかたのひかりのどけき春の日に

ええ、君、いい歌じゃないか。ひさかたのひかりのどけき春の日に、しづ心なく花の散るらん！ おれがこう

して歌ったって、そりゃ一銭にもなりやしないよ。一銭にもなりやしないが、じつにいい気もちじゃないか。この気もち、この境地つてものは、へん、当節の十田金貨を持ってきたって買えやしないぜ。おれは三月には、やめちまうんだ。三月からは宿なしスズメだ、しかし、しづ心なく花の散るらん！ って歌っていると、宿なしがなんでえって気もちになるんだから、ありがたいじゃないか。」

「……………」

「はばかりながら、福沢先生には、『しづ心』って境地はおわかりにならないね。人間『しづ心』がわからなくっちゃ、役にたつ学問も、へったくれもあるもんか。実学がなんでえ、実業社会がなんでえ。——ああ、いい気もちになったなあ。しづ心なく花の散るらん！ か。——一杯、どうだい。」

「あ、ありがとう。——どうも、たいした気炎だな。」

「社会実用の学じゃ、こうした熱はあがらないだろう。この意気、この熱、この境地。これだよ。人生において、一番、尊いものは。ああ、水が一杯飲みたくなつたな。——それはそうと、安さん、——あれはだめかね、あのほうは……………」

「あのほうって。——水は今、持ってくるよ。」

「うん。ありがとう。——あれって、あれさ。学資だよ。愛川の学資のことだよ。」

「それなら、さつき言つたじゃないか。」

「言つたかね。——ああ、そうか。だめだつて言われたんか。うん、だめだつて言われたんだね。……………そうかねえ、だめかね。……………どうしても、だめかねえ。」

「ど、どうにもならないって、……………どうしても、どうにもならないんだい。」

「学資が学資にならないってわけさ。」⁽¹⁹⁾

次野先生は「文学好き」の小説家志望であった。従って、社会における実利実用の学を避け「無用の学」を標榜した。明治開化期の反動として文学世界・無用の用の世界が志向され、それに伴って、福沢美学が拒否された事は前述の通りである。次野先生もそうした流れにあった。(酒の相手をしている安吉は慶応義塾に行った経歴を持っているのであった。)

しかし、次野先生は慕う吾一を彼の世界に引きずり込もうとしたのでもなく、また吾一の方も自らの意志を強め自己成長して行くのである。(有名な吾一の鉄橋事件があるが、これも吾一の自己確認の第一歩であった。)

次野先生の言で、興味深いのは、実学世界と和歌の「しず心」を対置している点であるが、これは別の国学の問題になろう。

吾一の進学問題は安吉の計らいで進展しようとする。実は安吉は自分が果たせなかった夢―学問をして社会有用な人物になるといふ―を吾一に託そうとしていた。この部分に『学問のすすめ』が登場する。

とにかく、愛川には、おれんから承諾を求めさせることにし、なお、こちらに帰ってきたら、次野からも、愛川によく話をしてやるということにして、日もないことだから、取りあえず吾一には、入学の準備をさせるように計らったのであった。

「あ、おれ、うんとやるよ。うんと勉強して、一番ではいるようにするよ。」

吾一は、励まされると、子どもなだけに、張りきり方も、また格別だった。

そういう元気なことを聞くと、「これでこそ。」と安吉も思うのだった。

「それじゃ、おじさん、まえ祝いに、一つ、いいものをあげよう。」

彼は立ちあがって、本だから、茶いろの表紙の、薄い本を一冊持ってきた。

「これはなん冊も続いているものだが、今のところは、初めの一冊だけ読んでおけばいいだろう。この本を書いた先生はね、昔、おじさんが習いに行つた学校の校長さんで、それはそれはえらい先生なんだよ。今の日本で指おりのえらい人なんだ、初めは少しむずかしいかもしれないが、吾一ちゃんのような者は、是非一度、読んでおかなくっちゃいけないものなんだよ。」

吾一はその本をもらつたが、あまりありがたいとは思わなかつた。表紙をあけてみても、「少年世界」のように、くち絵もないし、さし絵もないので、おもしろそうに思えなかつた。しかし、「学問のス、メ」という題名は、彼のその時の気もちに、ぴったりはまっていた。

天八人ノ上二人ヲ造ラズ人ノ下二人ヲ造ラズト云ヘリ

という書き出しが、なんとなく口調がいいので、意味はそれほどよくわからなかつたけれども、学問修業に燃え立っていた少年は、その書物に、知らず知らず引き入れられていった。

彼はうちに帰ると、その薄っぺらな本をたちまち読み終えてしまった。そればかりではなく、

人ハ生レナガラニシテ貴賤貧富ノ別ナシ 唯学問ヲ勤テ物事ヲヨク知ル者ハ貴人トナリ 富人トナリ 無学ナル者ハ貧人トナリ 下人トナルナリ

ということばなどには、すっかり、感激して、その所は、なんべんもくり返して読んだものだから、いつのまにか、そらで言えるほどになつていた。⁽²⁰⁾

進学し「学問修行に燃えていた」吾一が『学問のすすめ』から受け止めたのは、その冒頭の「天」は身分に係わらず平等に学び、自己実現が出来るのだという点であつた。

安吉の援助によつて中学校への進学を知つた父・庄吾は怒つて反対した。母・おれんは吾一が不憫ではあつたが、呉服屋の番頭忠助の申し出を受けて吾一を奉公に出すのであつた。この忠助の会話に『西国立志編』が引用される。

「おれんさん、まさか不承知なんじゃございますまい。——はははは。子どもを手ばなすのが、つらいんですかい。そりゃ、どこの親ごさんにしても同じでげすが、そこがそれ、修業ですよ。子どものうちに修業させなかつたら、おまえさん。……なあに、つらいことなんか、ちつともありやしませんよ。ただ、反ものあいだにすわつていさえすりゃいいんですからね。わが田に水を引くようでげすが、まず手まえどもの商売くらい、結構な商売はござんせんよ。」

「……」

「いいえ、ことわつておきますが、これはけして無理にってんじやござんせんからね。当節は人が多うござんして、あちらからも、こちらからも、『忠助さん、一つ。』つて頼まれますが、どういたして、そうやたらに、人をふやすわけにはまいりませんよ。——それからね、もう一つ、あなたに言つておきたいことは、おれんさん、あなた、しつかりしなくつちやいけませんぜ。うっかりしていると、吾一ちゃんだつて、どんなことになるかもしれませんよ。——

「……」

「わたしが心配するのはこなんですよ。おれんさん、あの調子じゃ、吾一ちゃんは、本当に、どうなるかわかりやしませんぜ。昔、わたしは西国立志編（サイコクリッシェン）つてものを、すこうしばかりかじつたことがござんすが、あんに、なんとかいう焼物師がいますよ。気ががみたい男で、セトを焼くために、うちにあるものを、いっさいがっさい、カマの中にたたきこんでしまうんだが、愛川さんも、どこか、その外国人に似たところがあやすね。訴訟のためには、なんでもかでも見さかいなく、みんな投げこんじまうんですからね。今に吾一ちゃんだつて、あんだだつて、投げこまれないとは限りませんぜ。」

おれんは氣を失つたように、袋はりの台の上よりかかつていた。頭がぼうつとしてしまつて、忠助のことば

なぞ、ほとんど耳にはいらなかった。死んだ父の、いかめしい顔だけが、目の前で、なんども消えたり、あらわれたりした。

「あんな男といっしょになると、泣かなくちゃならないぞ。」

結婚の前に、父がそう言ったにもかかわらず、彼女は振り切るようにして、愛川の所に嫁に来たのだった。それは色こいなぞという浮わついたものではない。彼女としては、あの時、そうするのが、女の道と思つたからだった。⁽²¹⁾

番頭忠助が読みかじつた『西国立志編』の「なんとかいいう焼物師」の話は、中村正直の訳文に照らし合わせると「第三編陶工三大家」の中の一人パリッシー (Bernard Palsay) の部分である。フランスの貧家に生まれたパリッシーは学校に行けなかったが、自ら上等の陶器を焼こうと決心した。何度も失敗を繰り返し、焼き窯に全てをつぎ込んでいく内に妻子を養う事も出来なくなつた。妻子は彼は気が違つたのではと思つた。しかし、彼は諦めずに挑戦して行き、十八年にして成功するのであるが、この話はそこで終わつてはいない。パリッシーを支えていたのは「新教(プロテスタント)」の信仰であつた。彼は異教たる信教を捨てなかつた為に獄中に繋がれるが「剛烈な心」を失わず獄死した「真正の大丈夫」の話であつた。

忠助が受け取つたのは自分勝手な行動で妻子を路頭に迷わす貧しい気違い男という事であつて、中村正直の訳文の意味はほとんど生きて伝わっていない。

有三は単なる思い付きの小道具として『西国立志編』を用いたのであろうか。

母が急死したのち、吾一は奉公先を逃れて上京する。

上京した吾一の行き場所は唯一つ家を出た父の住所であつた。訪ねたが父は居なかつた。居候の日々の間に下宿して居る黒田という画家に出会つた。彼の画論やポンチ絵は妙に吾一に興味をあたえた。

「あのな、小僧、世の中には、声を出す絵と、出さない絵とあるんだ。普通には、『無声の詩』なんて言つて、絵は声を出さないものとされているが、今の絵を見る。たゞ絵の具をなすりつけているだけで、詩なんかどこにもありやしない。『無声の詩』じゃなくつて、『無声の無』だ。おれはそれがしやくにさわるから、絵の中から声を出させようと思つているのだ。The very stones cry out:今の世の中は、『石なお叫ばん。』という時代じゃないか。絵だつて、声を出さずいられるもんかい。」

「……………」

「は、は、は。小僧、目を白くろさせているな、かわいそくに。——だが、まあ、聞け。ポンチつてものは、時代の声だ。だれがなんと言つたつて、ほえずにはいられねえものなんだ。かぜをひいた犬みたいに、黙つているのとはちがうんだ。金もちや書画やの前で、しつぽを振つてゐる手あいとはちがうんだぜ。下宿やの払いとはちがうおらせてゐるが、おかみにだつて、だれにだつて、かみつくんのだ。いや、おかみなんて、ちつぽけなものが目あてじゃない。時代の声をほえるんだ。おれたちは番犬じゃねえ、飼犬じゃねえ。時代の主人として、ほえようつて言うんだ。」

「時代の主人」つてことばが、吾一の胸にびいんときた。はつきりした意味はわからないが、年中、こき使われてばかりゐる彼は、なんとかして、一度「主人」というものになつてみたいと、猛烈に思つた。……

黒田は紙まきを一本ひっこ抜いて火をつけると、ゆつくり話した。

「おれはさつき、苦勞をするのはいいことつたと言つたな。おまえぐらいの時分に苦勞するのは、ほんとうにいいことなんだぜ。赤んぼうだつて、マクリを飲まされるんだ。まあ、それと同じだと思ふんだな。若いときに、いがい水を飲まなかつたやつは、ひだちが悪いよ。おれは『苦勞』を、おれの『先生』だと思つてゐるんだ。人間『苦勞』にしこまれないと、すぐいい氣になつちまうんでな。」

「……………」

「おれはいつも、おれのほうの畑に話を持ってつちまうが、ポンチにしたってそうだ。だれかにけとばされないと、何かにおさえつけられないと、腹の中から、ほんとうの声が出ないんだ。ねじふせられて、背なかに重たいものをのつけられたときに、『うゝん、こん畜生』と、はね返す力が、おれたちのポンチなんだ。『時代の主人』は、必ずそういう苦労の中から、生まれるんだ。——ところが、おれなんか、人間があまくできてくるものだから、すぐいい気になっちゃったんで、ステーンと、ひっくり返されてしまったのさ。⁽²²⁾

右の文のポイントは、一つは「石なお叫ばん」という事ともう一つは「時代の主人」という事であった。これは、あくまでも黒田自身の叫びであるが、それが吾一少年に（本来持っていた意志の上に）強いインパクトを与えた事は否めない。『自助論』（『西国立志編』の原著）の著者スマイルズの生涯もまさにセルフ・ヘルプの過程であったが、それは Rolling stone is no moss と評されている。「路傍の石」とは単に蹴飛ばされる石ではなく、転がる度毎に強い自己意志を強めるものであった。それが章の題名にもなっている「かんなんんじを玉にす」でもあった。黒田が保証人になって吾一はある文明堂という印刷所の文選見習いとして就職する。そこでも「かんなん」の継続であったが、原稿の校正でやって来た次野先生と再会する。今は夜学の商業学校で教えている先生を慕って夜学校に通いかねてからの望みを繋ごうとする。次野先生に「きさまは今に大きくなるぞ」と励まされるところでこの作品は中断（未完）にされている。⁽²³⁾

有三は『西国立志編』（及びスマイルズ・セルフヘルプの日本への導入とその過程）を十分に知っていた。そうした歴史的世界自体を作品の背景に置いていった。表面では反発する次野先生は「正直」に拘るのも、黒田の「金のとりこになるな」という考えも、そして何よりもスマイルズの原文自体が夜学での講演がきっかけであった。日本に導入されて多くの影響を与えたが、その中に秀英社という印刷会社を起こした佐久間貞一は多くの職工を育てたのである。

しかし、『西国立志編』の影響という点で前節で述べた独歩『非凡なる凡人』の正作とは異なる。正作は文字通り愛読する『西国立志編』そのものの生き方であった。そこには中村型人生の典型(モデル)が疑いのないものとして在った。吾一の場合はそうしたモデルがそのまま通用する甘い時代ではなくなっていた。あたかも十五年戦争の中にあり、外部からもその「生活」と「生命」が激しく揺り動かされる状況下にあつた。にもかかわらず「けなげに生きる」吾一であつた。作品は戦後書き継がれる事はなかつた。十分に戦後に通ずるものを残したのであるが……。

四、生きとし生けるもの——島崎藤村の実学志向

前節の次野先生は福沢・実学に反発しながら、「しず心」という和歌の精神に没入しようとした。「実学」と言えば漢字系のそれが通常取り扱われてきたが、国学と実学の問題はどのようであつたのか。それはただ、反発し拒否してきた過程であつたのであろうか。

ここで昭和十年代における島崎藤村の提唱を取り上げておく。

「昭和十六年一月雪の日脱稿」という藤村の「回顧」という作品がある。言うまでもなく藤村は父の時代・十九世紀・日本の夜明け前後を大正年間から執拗に追及してきた。その成果が『夜明け前』、『東方の門』である。そこには父達が熱心な平田篤胤の国学の信奉者であつた事への追想像から国学に対する深い観察がなされた。この間、保持され続けた課題は「なぜ、国学は明治以来日本学の主流として近代の形成に参画しなかつたのか」という事であつた。

この「回顧」はそうした課題に対する藤村の行き着いた回答であつたと考えられる。

『回顧』という文章は全集本で二段組十頁程度であるが中身は濃いものである。⁽²⁴⁾

大きく分けると三部分にならうか。

まず、父達の信奉した平田篤胤は本居宣長以後の国学の中で、「真の道は歌文末にあるのでもなく、儒者の教訓にあるのでもなく古記の真実を明らかにあり」とした。しかし、彼は偏狭な考えでなく外つ国・西洋からの伝聞も取り入れていって、維新への道を照らした。次の引用はそれに続く中心的な部分である。

平田一門としての父等はわたしたちの知らない明治維新前後の時代に際会し、先師を杖と頼み、古史の真実を燈火にかへ、それを高く掲ぐることによつて暗い行路を照らしながら、古代の神が大和民族に告げ置き給ふことを力に、僅かに精神の激しい動揺を支へて行つたかに見える。思へば父等も艱い時を歩いたものである。

こゝに蘭学と国学とを結びつける人が出た。およそ士分と名のついたもので漢籍に親しまなかつたものではなく、殊に徳川時代の医者仲間は本草学の智識を必要とする上からも漢籍の素養が深かつたから、さういふ人達の中から漢学と蘭学とを結びつけるものが徳川時代末期に輩出するやうになつたは不思議もない。しかし、蘭学と国学とを結びつけたのは、佐藤信淵あたりから始まつたことではなからうか。

佐藤信淵は青年の頃から江戸の字田川槐園に就いた蘭学者で、先輩井上仲、学友木村泰蔵からも天文、地理、暦算、測量等の諸術を伝へ得たといふ。この人が同郷の平田篤胤と相知るやうになつたは文政年度に入つた頃のことらしいが、篤胤の説を聞いて大いに悟るところがあり、それから経済や農政に關した智識をもつて古学の探求に向つた。二人の友情は蘭学と国学とを結びつける媒ちとなつたばかりでなく、互ひに影響を受けるといふことも起つて来たらしい。篤胤の神觀が宜長のそれと異なるところのあるのも、一つはそんな風に時代の異なるところから来てゐるらしくその著述の中にはすでに耶蘇教の神といふ言葉をも見る。医を家業とした篤胤は西洋生

理の訳書を涉つて神経といふやうな言葉まで使ふことを知つてゐた当時の新しい人だ。

そんなら父等の先師はどんな風に西洋を考へてゐたらうかといふに、

「もろくの学問の道、たとひ外国の事にしろ御国人が学ぶからは、そのよきことを撰んで御国の用にせんと

のことでござる。さすれば、実は漢土は勿論、阿蘭陀の学問をも、すべて御国學びと言つても違はぬ程のこと、則ちこれが御國人にして外国の事を学ぶ者の心得でござる。」

この考へ方を推し進めて行けば、吾国の人の外国語を習得し外国の学問を修むることは、実は国学の一部門であるといふことになる。篤胤は一概に西洋を排斥しようとするほど決して頑な人ではなく、新井白石の『采覧異言』、山村昌永の『増訳采覧異言』にも触れ、また蘭医ケンベルが『日本志』にも触れて、相応に世界のことに通じ、また吾国の世界に伍する位置をも考へ合せ、かく西洋の書籍なども次ぎ／＼に渡来して世に弘まり初めたのは、則ち神の大御心であらうとした。たゞ学問は、初めよりその志を高く大きいところに立て、その奥を極め尽さずには止むまいと堅く思ひこむが好いと教へ、そこに国学者の進むべき路を指し示してあるとも言へる。蘭学と国学とを結びつけた佐藤信淵はまた幾多の著述を遺したが、後に大久保利通が明治維新の始め江戸を東京と定むべき建言を思ひ立つたのも、信淵の遺著から得たことであつたといふ。学問の国家社会に影響するところも大きいと言はねばならない。

しかし、篤胤や信淵のやうな人達が次ぎ／＼に生れたわけではない。実に急激に国学は衰へて行つた。徳川時代の末から明治時代の初めへかけ、医書、兵書、万国地理、万国公法等の紹介は多く漢学の畠から出た人達の手によつて成された。漢学の素養を主にして世界の智識を吸ひとり新しい学問に進んだ人達に福沢諭吉、中村敬字の諸家もある。福沢氏のは『文明論』の鼓吹となり、中村氏のは『自助論』の訳述となつた。かれこれと思ひ合せると、わたし達の先人が西洋よりするものを先づ受け入れた方は民族としての長い鍛練や才能によることは言ふまでもないが、就中日本の漢学ともいふべきもの——則ち支那渡来の文化を同化し得たその能力を主なる素養の一つとして数へねばならない。このことは明治年代といふものを考へて見る上に重要な鍵となる。まつたく、わたし達が少年期から青年期に移る頃に受けた教育の主なる科目といへば、それは漢学と英学と数学とであつ

て、国学は与からなかつた。主客はその位置を替へてゐた。⁽²⁵⁾

この藤村の叙述にはかなり深い彼の研究の跡が見られる。いくつか重点点をあげておく。

一、西洋に日本を開き（開国し）日本の古き神の道を統合しようとした篤胤には、西洋の生理学をはじめとする自然科学の導入が見られた。

二、西洋的な要素を導入する場合に「耶蘇教」の影響も見られた。

三、この考えを進めると「外国語を習得し外国語を修めることは国学の一部門」になつて行くはずであつた。

四、しかし、それには漢学の基礎的素養が必要であつたので、国学は与からなかつた。

藤村がこうした見解を抱く前提には、直接か間接かは別にして村岡典嗣氏の国学研究の成果などが既にあつたが、戦後の実学研究への重要な示唆が見られるのである。例えば、蘭学は漢学の基礎的な伝統の上に開花したという考である。（戦後の洋学史研究上でいかに蘭学と漢学との対立か折衷かが長く論じられた事か。）

こうした藤村の関心は「国学」と「西洋」自然科学の問題へと展開する。それが次に掲げる第三番目の部分である。

これを書きかけてゐるところへ客が見えて、その人は理学の専門家であるところから、昨今やかましい科学奨励のことがわたしたちの話題に上つた。この非常時の空気はわたしたちの生活にまで深刻に浸つて来るやうになつて、ラヂオの放送にもしきりに科学奨励の声を聴く。何と言つても現代の急務は自分等を延ばして行くことにあるが、どうしたら自分等の持つて生れたものを延ばし得よう、そんなことがわたしの胸にある時で、過去の日本に科学の生れなかつた理由を客に尋ねた。その時、客は次のやうな説明をした。科学する心は吾国にも早くからあつたのだ、ニュウトンと同時代に吾国にも和算の大家があつて、同じやうな高い数理を発見してゐたことは数学史の証するところである。かの蜜蜂が人を刺す毒素を研究して、瑞西人は神経痛の注射液を発見した。とこ

ろが支那や日本の本草学にはずつと早い時代にあつて既に同じ療法を報じてある。そればかりではない、東西十八世紀初めの頃を比較するなら、おそらく我は科学する心に於いて彼より進んでゐたらうと思はれるくらゐだ。

例へば西洋に薬品の化合から鼠が生れると書いた学者の書物があつて、多くの人もそれを信じたらしい十八世紀の初めを吾国に当て嵌めて見るなら、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。たゞ二百五十年にも互る徳川時代の泰平がそれほど科学的な発見を焦眉の急としなかつた。その必要に迫られなかつたのだ。だから学問上から見て好い発見があつても、その多くは秘伝とか奥儀とかに隠され、それを実際の生活に應用することに欠けたのである。こんな話を客が置いて行つた後で、いろ／＼なことがわたしの胸にも浮んで来た。一体に吾国の人の氣質には物を対立的に考へ易い傾向が眼につく。そのことは前にも述べた西洋を物質的とし東洋を精神的とする意見にも

見て取ることが出来る。もつと卑近な例で言つて見るなら在来の劇の舞台の上にもさうした幾多の場合を見出すことが出来る。善と悪との際立つた対立の類がそれである。所謂雅なるもの果して雅か、俗なるもの果して俗か。うち見たところ一切の事物はさういふ風に片付けられ、すべて対立した位置から考察せらるるやうに見受けられる。これは事物の比較に進み得る階段であり、もしこの氣質を適當によく延ばし得てその方向をあやまらぬなら、新旧の判別宜しきを得て、まことの革新をこの世に持ち来すこともさう困難ではないだらう。ところが、かうした性急な氣質の奥にあるものは、さうでない。すこし注意深い観察者であるなら、むしろ全く正反對の傾向をその奥に見出すであらう。その心境は、たやすく天と人とを結びつけ、物心一如を許し易い。人生を達観するかのやうに見えて、実は中途に安住し、決然として万物の秘密に突き入らうとしないのがさうした心境の行き詰まり易い点ではなからうか。これは科学する心からかなり縁遠いことのやうにも思はれるが、果してどんなものだらう。(傍線は筆者補)

右の文中の来訪者とはフランス遊学中からの友人石原純(東北大学教授、物理学者で歌人。恋愛事件で退官後、自然科学

啓蒙家として活躍)であつた事が判明している。藤村は日本に科学的伝統が無かつたのでなく、「科学」と「生活」を結ぶ努力が足らなかつたという指摘をする。「科学」は十分に成立したがそれ自体では実学にならないと考えたのである。(ここで「実学」という表現は用いていないが……)言うまでもなくこれも戦後研究の前提を示唆しているのである。では、彼にとつての「科学」と結ぶ「生活・生命」の学はいかに求められておらうか。

次に掲げる「回顧」の最後の部分が実によく物語っている。

わたしは父を追想することからはじめて、思はずこんなことをこゝに書きつけた。それといふも他ではない、……過去の眞実も、その生命も、現に今なほわたしたちの内部に生きつゝあるものとして思ひを潜むべきであると考ふるからである。

かう書いて来て見ると、わたしの前には今、二つの像がある。苦しい学問上の抗争を続けた兄弟は、二つの道をわたしたちに指し示して見せる。わたしたちはもつと歴史的に物を見ることを学ばねばならない。そして過去より泡立ち流れて来た二つの精神を突きとめねばならない。歌文を心とした本居派の風雅も、復古を心として実行にまで趨いた平田派の直情も、一切を創造の精神の過程に於いて捉へるこそ、後代に生れたもの、つとめであらう。

彼の言う「いまなお私たちの内部に生きつつあるもの」への自覚こそ、「生きとし生けるもの」の根底であり、「創造」への実学(「ここだな」の自覚)であつたのだと考えられる。

本稿の終わりに戦前、戦中における「実学研究」についてふれておきたい。

昭和の初め、日本思想史を学問として樹立したと言われる村岡典嗣氏は明治維新はそれに先立つ近世の学問の展開によつて齎されたとした。特に在来の儒学、心学、国学などに鎖国下に洋学が起こつた事を重視し、「たとえば、儒教や仏教の合理主義に対して国学や蘭学の実証主義、儒教や神道等の国家主義に対して洋学の世界主義、さらに儒教

が実用主義に対して国学のうちには純学問的主義の存するあれば、洋学はこの間に介在してその実用主義において儒教と結びつきその科学主義に於いて国学と相通する……（なお、耶蘇教と国学とが通じた事も指摘している。）⁽²⁸⁾村岡氏の指摘は重要な指摘であり、種々の傾向を「……主義」で分析した。その中で「実用主義」、「科学主義」とは把握したが、「実学（主義）」とは言っていない。

すでに、ここには、「科学」と「生活」との乖離問題とそれへの課題が提示されている。丸山論文自体が学問を転回したいとする前に、前提として提示された実学をめぐる諸課題があったのである。その戦後に課せられていた課題は「国学」と「洋学」の問題でもあった。また、戦後において、実質的にははじめて「実学主義」が提唱されてきたとも考えられるのであるが……。

では戦後に投げかけられた課題は果たして解決されたのであろうか。改めて問われるところではある。

註

※ 筆者達はキリシタン時代以後の「南蛮学統」に新しい開化的現象を考察してきた。「三つの開化」への着想である。故海老沢有道先生の業績が思い出される。

(1) 『東洋倫理』岩波全書 昭和九年。同書に和辻哲郎著『人間の学としての倫理学』がある。

(2) 「戦後になってすぐ私の頭に浮かんできた反応は、戦争中の鎖国がとけたという事です……ところが南原先生は非常に反時代的な（欧米文化の全面排除の時代に反する）事……助手論文の註の半分くらいは外国文献を使えなどと無茶なことをおっしゃる。」『原型・古層・執拗低音』岩波書店 同時代ライブラリー84。

(3) 「横井実学党の世界からの出発」色川大吉著『明治精神史 上』講談社 昭和五十一年。

(4) たとえば、『実学思想の系譜』講談社学術文庫 昭和六十一年。

- (5) 徳富健次郎著『竹崎順子伝』福永書店 大正十二年 九十九頁以下。
- (6) 飛鳥井雅道著『明治大帝』ちくま学芸文庫 一九九四年 では天皇の明治六年頃の「御学問」の内容中、中村正直の『西国立志編』を注視し、明六社の啓蒙主義者（福沢諭吉を除く）の影響を指摘している。そして「元田永孚らの儒学の影響はややおくれ、明治十年近くなつてからである。」と指摘する。昭憲皇太后については芳賀徹氏が「啓蒙家春子皇后」を見事に描き上げている。ここでも『西国立志編』などを注目している。『大世界史—明治百年の序幕』文芸春秋社 昭和四十四年。
- (7) 前掲『竹崎順子伝』一九九—二〇三頁。
- (8) 前掲の伝記中、二二〇頁。なお、盛岡・日新堂と熊本の比較を、講演「日本日新堂物語」（於、盛岡中央公民館 十月十三日）で行った。
- (9) 藤原暹著『日本における庶民的自立論の形成と展開』ペリカン社 昭和六十二年。
- (10) 使用本は『実業の思想』現代日本思想体系11 筑摩書房 一九七〇年一七九頁以下。
- (11) 同右 一八一頁。
- (12) 同右 二四六頁。
- (13) 同右 一四七頁。
- (14) 本稿で参照した『西国立志編』は渡辺昇一編 講談社学術文庫 昭和五十六年。
- (15) 前掲『実業の日本』二一四頁。
- (16) 松本慎一・西川正身訳『フランクリン自伝』岩波書店 一九五七年参照。なお、『非凡なる凡人』については前掲藤原著に詳述。なお、スマイルズ・セルフヘルプではフランクリンについて三カ所の記事がある。それは彼の優れた品性と少時に受けたコットン・マザーの『善をなす文』からの感化についてである。その感化はフランクリンからドルーに伝わったと言う。
- (17) 同右 一七頁。
- (18) 前掲『実業の日本』二五四頁。

- (19) 本稿で使用した『路傍の石』は『山本有三集』日本文学全集27 集英社 昭和四十七年 三十八頁。なお、「実学」は三十頁以下。
- (20) 同右 七十七頁。
- (21) 『西国立志編』は前掲本。一四二頁以下「陶工三大家」。一四三頁に「ベルナルド・パリツシー」がある。
- (22) 前掲本『路傍の石』一五〇―一五一頁。
- (23) 中断後、『主婦之友』に続編を書き続け、「日本はどこにあるか」、「学校」、「あらしのあと」、「五十銭銀貨」、「お月さまはなぜ落ちるのか」が書き続けられたが、これも昭和十五年七月号で中止した。なお、この続編中に主人公吾一は十九歳に成長して、夜学の商業学校を卒業し、一人前の文選工として自立した。そして私立大学の夜間専門部に入學してさらに勉強を続けるのである。この過程にも、『学問のすすめ』が登場する。彼が懸賞論文「処世の道」を投稿する時に五つの「ん」を考案する場面である。五つの「ん」は「発憤」「学問」「勤勉」「決断」「天運」である。しかし、この五つの指針は『学問のすすめ』というよりは『西国立志編（自助論）』の徳目である。因に「お月さまはなぜ落ちないか」という章で「吾一は寝る前に格言とか有名な詩句を：毎晩書くのが彼の習慣になっていた」というくだりがある。これこそスマイルズ・セルフヘルプの精神であった。吾一の人格の深層に『自助論』があったと考えられるのである。
- (24) 十川信介編『藤村文明論集』岩波書店 一九九八年 一三七頁以下。
- (25) 同右 二四五―二四八頁。
- (26) 同右 二四九―二五一頁。
- (27) 同右 二五二頁。
- (28) 村岡典嗣著『日本思想史概説』創文社 昭和三十六年 所収「近世思想史の文化的背景と時代区分」三九七頁。